

短 報

聖路加看護大学看護実践開発研究センターにおける 継続教育の現状と課題

－認定看護師（不妊症看護・がん化学療法看護・訪問看護）
教育課程に焦点を合わせて－

松谷美和子¹⁾ 森 明子²⁾ 實崎 美奈³⁾ 林 直子⁴⁾
大畑 美里⁵⁾ 本田 晶子³⁾ 田代 真理³⁾ 山田 雅子³⁾

Current and Future Trends for Continuing Education at the Research Center for Development of Nursing Practice at St. Luke's College of Nursing: Focusing on Certified Nurse in Infertility, Cancer Chemotherapy, and Visiting Nursing

Miwako MATSUTANI, RN, PHN, PhD¹⁾ Akiko MORI, CNM, PHN, PhD²⁾
Mina JITSUZAKI, RN, CNM, MN³⁾ Naoko HAYASHI, RN, PHN, PhD⁴⁾
Misato OHATA, RN, CNS, MN³⁾ Akiko HONDA, RN, CNS, MN³⁾
Mari TASHIRO, RN, CNS, MN³⁾ Masako YAMADA, RN, CNS, MN³⁾

〔Abstract〕

This is the report of the present status and future plans for three Certified Nurse courses provided at *the Research Center for the Development of Nursing Practice at St. Luke's College of Nursing* from 2008. There is a downward trend in student applications for these courses. The lack of manpower makes it difficult for nurses to leave their position to return to school. The research center has to make an effort to make it easier for nurses to commit to their continuing education. We, as educators must better serve and follow up on our graduates of the courses in order that they can assume their roles as a Certified Nurses in their special area.

〔Key words〕 Continuing Education in Nursing, Certified Nurse, Infertility Nursing, Cancer Chemotherapy Nursing, Visiting Nursing

〔要旨〕

聖路加看護大学看護実践開発研究センターにおいて2008年より開設している3つの看護分野の認定看護師教育課程について、現状とその課題を報告する。現状からは、受講希望者の頭打ちおよび減少傾向が次第に明らかとなった。その原因は、実践現場の人員の不足によるものと考えられる。

今後、当該センターは、受講希望者の受講促進のために努力するとともに、課程修了者がその役割を十分果たせるようにフォローアップ研修を充実させていく。

〔キーワードズ〕 看護継続教育, 認定看護師教育課程, 不妊症看護, がん化学療法看護, 訪問看護

1) 聖路加看護大学 看護教育学 看護実践開発研究センター St. Luke's College of Nursing, Nursing Education
2) 聖路加看護大学 母性看護学・助産学 St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing and Midwifery
3) 聖路加看護大学 看護実践開発研究センター St. Luke's College of Nursing, Research Center for Development of Nursing Practice
4) 聖路加看護大学 成人看護学 St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing

I. はじめに

聖路加看護大学看護実践開発研究センターでは、2008年に認定看護師教育課程3コースを開講した。615時間のまとまった教育プログラムを学部及び大学院以外で開講した初めてのケースとして、本学における看護師の継続教育の現状と課題について報告する(図1)。



図1 認定看護師教育課程 入学者数推移

II. 認定看護師教育課程

認定看護師教育課程は、日本看護協会が定める認定看護師制度に基づくものであり、当該センターは、3つの分野における認定看護師教育機関としての認定を受けている。この課程の修了者は日本看護協会が実施する審査を受けて、特定分野の認定看護師となる。

認定看護師は、看護の実践現場において、その熟練した知識と技術によって質の高い看護ケアを広め、浸透させていくために主導的に機能することが求められる。その役割は、実践、指導、相談である。看護の対象となる個人や家族、そして、それら集団に対して、熟練した技術によって高い水準の看護を実践する。また、それらの実践を通して看護者に指導を行い、高い水準の看護ケアが必要とする人々に行き渡るように機能する。さらに、看護者の相談に応じ、その分野での看護をする上での問題の明確化や解決を助ける。

III. 研究センターにおける認定看護師教育課程の現状と課題

1. 不妊症看護コース

不妊症看護コースでは、目的を「不妊症看護の質の向上を図るために、不妊の問題を抱えている個人およびその家族に、適切なアセスメントを行い、全人的なケアを実施し、その実践力を基盤としてスタッフナースの相談・

指導を行う能力を育成する。更に、不妊症医療チームにおける看護の役割を果たせる能力を育成する。」として教育課程を展開している。

学科目および授業時間数は日本看護協会の教育基準カリキュラムに則り、がん化学療法コース、訪問看護コースとの合同で開講される共通科目105時間の他に、専門基礎科目としてリプロダクティブヘルス、生殖の基礎知識、不妊症の診断と治療、不妊症と社会が90時間、専門科目として不妊症看護概論、不妊症看護の基礎理論、不妊症看護援助論Ⅰ、不妊症看護援助論Ⅱ、不妊症看護カウンセリング技法、不妊症看護マネジメントが165時間、演習および実習が255時間の、合計615時間で構成されている。

演習では聖路加・テルモ共同研究事業の一つである「ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ」の不妊症の回の企画から評価までを実施しており、実習は不妊症看護認定看護師が勤務している生殖医療施設で実施している。



写真1 不妊症看護コースの演習「ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ」の開催風景

定員は15名で本センターのミーティングルームを主教室としており、会議机をとり囲みアットホームな雰囲気の中で講義を受けている。不妊症看護分野は当該センターが全国で唯一の教育機関ということもあり、研修生は東北から九州までの広範囲から通学してきている。またその所属先は大学病院・総合病院の病棟や外来、不妊治療専門クリニックと多岐にわたっていることもあり、様々な場面においてそれぞれの環境や現状について情報を交換し共有している。

本コースの研修生を対象とした教育課程における研修前後での知識、実践、取り組みについての5段階評価による自記式質問紙調査では、知識に関する全7項目、実践に関する10項目中9項目、取り組みに関する7項目中5項目の得点が有意に上昇しており、残り3項目は有意差がなかったものの得点は上昇していたという結果が得られている¹⁾。

不妊症看護分野の教育は2002年度より始まっており、2011年現在で112名が認定を受けているが、全国には600余の生殖医療施設があることを考えると、この人数は決して十分とはいえない。不妊カップルへの専門的なケアの必要性を感じている看護職者は少なくないにもかかわらず、本コースへの入学には至っていない。その背景の一つとして、不妊カップルへのケアは性や生殖、不妊治療や患者心理に関する専門的な知識を駆使しての情報提供や看護相談が中心であり診療報酬に結びついていないことが挙げられる。今後は不妊症看護認定看護師の育成のみならず、不妊症看護認定看護師がその専門性を発揮し活躍していくことを支えつつ、生殖医療チームの他職種や患者団体とも協力して診療報酬に結びつくような看護技術について検討していきたい。

2. がん化学療法看護コース

がん化学療法看護コースでは、がん患者とその家族が最善の治療過程をたどり、充実した生活を送れるよう援助する専門家、すなわちケアの質を担保し、提供できる能力を備えた看護専門職の育成を目指している。課程を通じて、単に「講義を受ける、教えてもらう」という受け身の姿勢ではなく、研修生が「自ら学ぶ」という姿勢で主体性をもって取り組むことを支援し、新たな状況を切り開いていく逞しさや誠実さを育むことを心がけている。そのため、講義にも多くのグループワークを取り入れている。60時間の演習では、まず「最新のトピックスに関すること」をテーマに、各自の関心領域における動向を話し合い、文献をもとに理解したことをプレゼンテーションしている。コミュニケーションに関する演習では、ロールプレイを通して、治療を受け続ける患者・家族の思いや体験について理解を深め、認定看護師の役割を探求している。

講義科目では、学内のみならずがん医療の第一線で活躍する様々な専門家の協力を得て、がんの病理学的特徴や疫学、基礎概念・理論の学習に始まり、疾患別の標準治療や各レジメンの特徴とその看護、臨床薬理や臨床試験について学んでいる。実習前には本コースの修了生を招き、活動の紹介や交流の機会を得ることで認定看護師の活動や役割をイメージできるよう工夫している。「がん化学療法薬の投与管理とリスクマネジメント」では、お互いの血管の走行を観察、描写するとともに、モデルを使った穿刺手技の演習を行っている。また、防護衣を身につけて、蛍光塗料入りの薬液を抗がん剤に見立てて調剤し、ブラックライトを使用して調剤後の飛散状況を確認している。このように、抗がん剤の安全で確実な投与、取り扱いについて学習を深めることで、日頃の手技や実践を見直す機会を得ている。

本コースでは、自施設で行う実習Ⅰ（45時間）と、都

内近郊のがん専門病院など他施設で行う実習Ⅱ（135時間）を取り入れていることも、特徴のひとつである。特に、実習Ⅰでは、患者への実践に加え、施設の医療システムの把握や課題の検討を行うために、日頃働いている職場に一人の実習生として臨み、他部門への交渉や調整を自ら試みることを課している。これにより、組織の特徴を踏まえて横断的に活動するための自身の課題を見出すことへと繋げている。

職場を離れず学習することで、臨床の疑問や事象とコースでの学びを常に結びつけながら深めていけることは、本課程の大きな利点である。また共通科目を通じて他の認定分野の研修生と共に学習することで幅広い視点や課題を共有する機会が得られ、その経験が他の医療職、部署との協働の素地になると考える。一方で、新規抗がん剤や分子標的薬の開発など、日々進歩するがん医療において、治療の外来化も進む中、より高度な実践力が求められることから、個々の研鑽もさることながら、本課程修了後の継続的なフォローアップ体制の確立も必要であると考えられる。そこでこれまで修了生の自主開催の形で行ってきた勉強会を、平成24年度以降はセンター事業に位置づけ、抗がん剤に関する最新のトピックス等を学ぶ場を定期的に開催する予定で現在準備を進めている。



写真2 がん化学療法コース演習 調剤の様子

3. 訪問看護コース

訪問看護コースにおける最初の講義は「訪問看護概論」で、訪問看護の歴史や制度とともに、訪問看護を伝える手段としてプレゼンテーションの仕方・レポートの書き方などを伝えている。本コースの目標は、情報を集めてそれを自分の力で読み解き、意味を見出し表現することである。その訓練の一つとして研修生同士でディベートを実施するなどの工夫をしている。訪問看護では様々な疾患の患者・家族が対象となる。「在宅医療病態論」では60時間かけて、在宅療養者に多い疾患に対しての病態・治療・看護を学ぶ。認知症、糖尿病、神経難病、心疾患や呼吸器疾患はもちろん、訪問看護件数が少ない傾向にある精神疾患や小児疾患に関しても、学内外

の講師の協力を得て、最新の知識や技術を伝えている。また、「ケースマネジメント」では、その概念、方法論とともに、ケアに携わる者の役割を明確化し、連携・協働していくことの大切さを学ぶ。そして、在宅療養のためにはセルフケア能力の維持・向上が必要となるため、セルフケアの視点から家族も含めてチームでケアを展開していくことの大切さを伝えている。また「在宅ケアシステム」では他施設を訪問し、他職種が訪問看護に期待する役割についてインタビューを行い、その結果をプレゼンテーションすることで、自らを取り巻く環境に目を向け、客観的視点を持つことの大切さを実感できるようにしている。また、「安全管理」では訪問看護における事故の特徴についてグループワークしたり、スタンダードプリコーションについて調べた上で、自施設の感染対策の現状と課題を考える機会を持つようにしている。講義形式の受動的な授業だけでは、その場限りの知識でなかなか実践力が身に付かないため、フィジカルアセスメントやBLS(Basic Life Support)、HPN(Home Parenteral Nutrition)のロールプレイ、人工呼吸器や移動用リフトの演習、グループワークなど、体験型学習を心がけている。



写真3 BLS (Basic Life Support) の実技演習

11月下旬からは、研修生1～2名ずつ東京近辺の訪問看護ステーションで実習を行う。医療依存度の高い患者や終末期患者、退院調整が必要な患者等を受け持ち、認定看護師の役割である実践・相談・指導を体験する。週1回は帰校日を設け、各々の体験を共有するようにしている。そして、9カ月間の集大成として実習成果報告会で、自らの学びを発表する。

しかし、当コースにおける615時間のみでは訪問看護における知識や技術をすべて学ぶことは不可能である。幅広く豊富なカリキュラムではあるが、働きながらの週末開講であるため、レポートや課題に追われ、納得いくまで疑問に向き合う時間が不足している。学んだ知識を

繰り返し活用しない場合、日々の看護業務に流され、なかなか本コースで得た知識が身に付かず、いつまでも確かな知識と技術に裏付けされた看護が展開できないと訴える研修生も多い。研修生が講義や実習を通して、自ら学習を重ねていくことの必要性を認識し、学習の仕方を習得できるよう関わっていくことが課題である。

IV. 今後の課題と展望

当該センターでは、この4年間、既述の認定看護師教育課程3コースを同時期に開講してきた。これらの課程には各地から経験豊富な受講生が集まり、彼らは専門を同じくする同業者として現場の状況を語り合い、有意義な情報を交換できる仲間になって持ち場に帰っていく。センターでは、関連知識を系統的に効率よく学んで知識基盤をつくる。しかし、実践の場ではそれらを基盤に、さらに知識を得る必要が出てくる。そこで、信頼のできる情報の収集法を学び、得た情報の批判的吟味の力を身に付ける。また、分野によって、カウンセリング技法、卓越したコミュニケーション技法、ケースマネジメント法、アセスメント技法、判断力や意思決定が求められ、マネジメントやリーダーシップが必要とされる。これらは、理論や方法論を学ぶだけではなく、実際に活用できなければならない。

1. 研修に出せるほど人的な余裕がない事業主

当該センターは、これまで、不妊症看護コース53名、がん化学療法看護コース114名、訪問看護コース88名、合計で255名の修了生を世に送り出してきた。一番の課題は、受講の強い希望があっても、それが受験そして受講に結びつかないことである。

その理由は、職場のマンパワー不足にある。実践力を向上できる充実した自己研鑽の必要性を認識しながら、研修に出せるほど人的資源に余裕がない。熟練した実践者が、継続教育によって、実践の基盤を確かにし、高い水準のケアを周囲の看護師に伝達でき、その職場の看護ケアの質が向上する。これによる患者満足度や経済的な効果は絶大である。個人の自己研鑽ニーズの満足と自信および実力の向上、そして、その成果として患者や医療機関であるステイクホルダーに還元されるメリット、このような双方にとっての益をもたらす循環をつくるためにも、看護師の自己研鑽の機会が重要である。厚生労働省は認定看護師育成支援に平成21年度と22年度の予算案に2.9億円を計上したが、職能団体や学術団体も自己研鑽に助成を出す姿勢があってもいい。また、医療機関などには研修に出すための余裕を持たせる人員配置を義務付ける仕組みを仕掛けることも必要である。当該研究センターもなお一層受講者の確保に努力しなければなら

ない。

2. コース修了後のさらなる自己研鑽

当該センターが提供するコースは、ここまでの説明でも明らかなように、その分野の専門職者として自己啓発を行いながら、日進月歩の医療について知識や技術を批判的に取り入れ、実践に応用できる実践者となることをめざしている。このため、認定試験受験資格を得られる課程を終えた後のフォローアップを希望者に行い、実践現場に着地後の修了生を支援している。実際に学んだ内容が身につくこと、実践に活用できることを見届ける丁寧なフォローアップは、当該センターならではの特典である。これには、強化のための研修とコンサルテーション・サービスがあり、教育課程での学びの強化と実践現場での課題解決のための相談によって、修了者は研修を終えた後も、当該センターにつながっていることを心の拠り

所として、自信をもって活動を続けることができる。立場を変えると当該センターが実践現場とつながっているということができる。このことの重要性を再認識し、こうした努力を今後も積み重ねる所存である。

当該センターは、自ら学ぶ姿勢を育み、自律した働きができる実践者として自信をもって活躍できるような看護師に成長するような自己開発を促進している。当該センターで実力を身につけた修了者が認定看護師として活躍し、職場の看護師により影響を及ぼし、結果として良質の看護ケアが実際の患者や家族、そして地域に届くことを願っている。

文 献

- 1) 實崎美奈, 森明子. (2010). 不妊症看護認定看護師教育課程の評価と課題. 日本生殖看護学会誌, 7 (1), 20-26.